

西国巡礼と四国遍路の再考察と現在の巡礼者の動き (その1)

前 田 卓

Saigoku and Shikoku Pilgrimages Revisited
—Contemporary Trend (1)

Takashi Maeda

Abstract

It has been twenty years since "Sociological Study of Religions Pilgrims" was published by the author. This paper attempts to respond to the criticisms given ever since.

It also clarifies the contemporary patterns of both Saigoku and Shikoku pilgrims that have changed in the last two decades: The number of pilgrims have doubled and more than half of them are in their 40's and 50's replacing the ones in their 60's.

Key words ; Religious pilgrims. Saigoku 33 temples. Shikoku 88 temples. the annual number of pilgrims, old people.

抄 録

私が、『巡礼の社会学』(1970年: ミネルヴァ書房)を刊行してから今年でちょうど20年になる。この20年間で、社会学者や民俗学者、更には歴史学者から私の論文に対して、その研究内容の不十分さや誤っている箇所を、彼等の著書や雑誌の論文を通して、いろいろな側面から指摘された。

例えば、西国巡礼の納札は、33カ所の札所にしか見られないと、私は考えていたので、江戸時代の納札の調査も西国霊場のみに限って行なった。その後の「元興寺文化研究所」の人々などの研究によると、札所に所属していない寺、すなわち当麻寺、桑実寺などからも多数の納札が発見された。同研究所の調査によると、霊場以外の寺から発見された納札も出身地別に分類したところ、私の調査した結果とは異なった結論になったと言う。

そこで、両者の結論の違いが、どこから生じたかということを私は解明した。その違いは、江戸時代前期の巡礼者達は、関東地方などの東国人が圧倒的に多かったが、幕末になると長州や肥前長崎などの西国の人々が多くなったように、時代によって巡礼者の出身地が異なるからである。

次に、石山寺で発見された室町時代の納札に「順礼聖」という文字が刻み込まれていた。「巡礼ブーム」が始まった室町時代後期の「巡礼の大衆化」に、現在の“ツアーの添乗員”のような役割を果たした「順礼聖」について、「高野聖」と対比しながら論述した。

最後に、西国霊場の巡拝者たちが、昭和45年と20年後では、非常に異なっていることが二つあったことを明らかにした。第一は、昭和45年には一年間の巡礼者の数が3万名であったのが、昭和50年代からその数が急激に増大し、現在では8万名近い人々が霊場を巡っている。第二は、年齢層に変化があらわれた。すなわち、年齢別に見ると、昭和45年には60歳の巡礼者が一番多かった。ところが今回の調査では、巡礼者の割合が一番多かったのは50歳代であり、次に多いのは40歳代であった。そして、60歳代は第三位に落ちていた。

キーワード; 西国33カ所巡礼。四国88カ所遍路。納札。東国武士。西国武士。巡礼聖。高野聖。一年間の巡礼の数。江戸前期。江戸末期(幕末)。

序にかえて

「修学旅行」と江戸時代の巡礼

京都に住んでいると、日本の各地から「修学旅行」で京都にやってくる高校生の団体にしばしば出会う。

教師に引率され、数十名の学生が一団となって歩いている姿を見ると、外国の友人たちは、必ず「あれは何ですか」と尋ねる。「修学旅行」という慣習のない欧米人にとっては、真っ黒な制服を着た集団は、よほど異様なものと見えるのであろう。

この日本独特の「修学旅行」は、国の学習指導要項に定められた立派な教育活動であり、現在では、小・中・高等学校の9割以上がこれを実施している。ところで、この修学旅行の歴史は古く、今から100年前の明治19年に筑波大学の前身である東京高等師範学校が最初に行なった。

次いで翌20年には長野師範学校でも実施され、やがて全国に広がっていった。ただ当時の修学旅行は、現在のように、地理や歴史、更に各地方の文化を学習するというよりは、むしろ、1日に7里(28km)も歩く「長途遠足」の色彩が強かった。

ところが、明治末期になると鉄道などの交通機関も発達するにつれ、修学旅行の日程も増え、更に距離も遠方へと長くなった。そして明治の末期頃になると「満州戦蹟視察旅行」などと称して、現在の中国の東北地方にまで足を延ばすようになってきた。

ところで、日本の修学旅行は一種の通過儀礼のようなもので、その原型は、すでに江戸時代に巡礼という形で見られたのである。

結婚前の男たちが集団をつくり、また未婚の娘たちが、「老人の^{せんだち}先達」に引き連れられて、何日も泊まりがけで、はるか遠い土地（現在から考えれば、未知の外国）に旅をする慣習があった。それが西国巡礼であり、また四国遍路なのである。

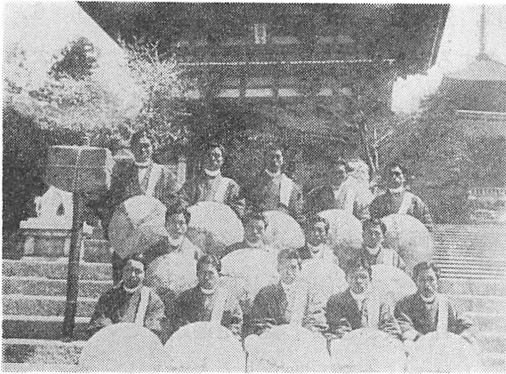
京都の向日町にある旧物集^{もづめ}女村では、10代の若者たちは、西国巡礼を体験しないと、嫁をもらうことができないという慣習が、江戸時代から、戦後まで残存していた。(次頁の写真参照)

すなわち、この村では3年に一度、未婚の男性(17歳より19歳までの若者)十数名が、「同行^{どうぎょう}」と呼ばれる若衆組をつくり、3月の下旬に、西国巡礼の旅に出るように義務づけられていた。

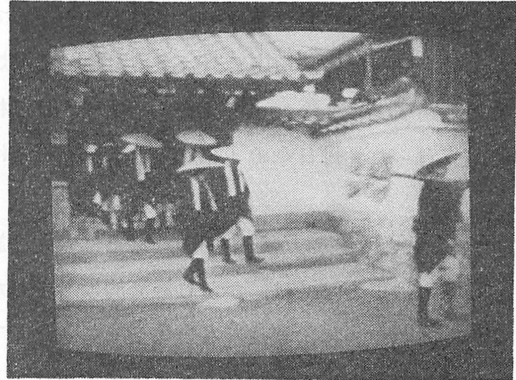
出発に際し、3年前に巡礼をすませた「先輩」たちから、道中日記が渡される。これから巡礼に出る「同行の若衆たち」は、この日記に書いてあるのと全く同じ行動をとらねばならない。

たとえば、新宮から第一番の札所那智山に到着するまでの道中では、少なくとも30軒の家のカドに立ち、御詠歌をあげる“お修行”をせねばならない。

また、那智山から「湯の峯温泉」に1泊した翌日は、写真にあるような大きな竹筒に入れた梅干しと「にぎりめし」だけで、田辺の町までの18里の山道(中辺路)を1日で強行軍しなければ



京都物集女村の西国巡礼



物集女村を出発（昭和47年NHK放映）

ならぬことも書いてある。

江戸時代に、巡礼に出たのは、未婚の男性ばかりではない。未婚の女性も旅に出たのである。

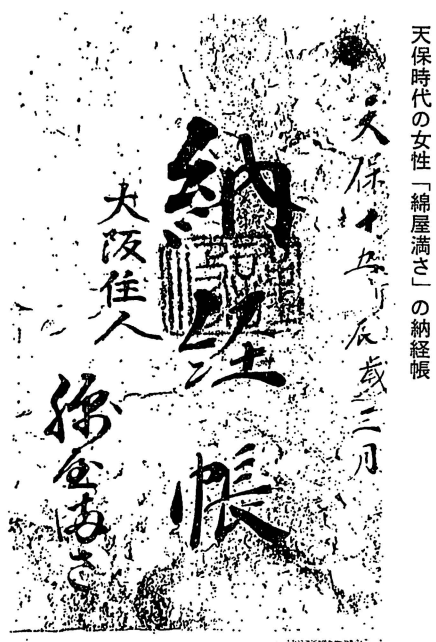
嫁入り前に、女も一度は巡礼を体験しなくてはならないという慣習は、江戸時代から各地に見られた。菜の花の咲く三月の初め、赤い杖をついた老人の「先達」に連れられた十数名の娘たちが、遍路道を歩いている姿は、四国の春の風物詩であった。とくに人目を引いたのは、腰まき、手甲、脚絆や手拭もすべて藍色に染め抜いた揃いの遍路姿をした「讃岐の伊吹島の娘遍路」や、伊予ガスを着た「宇和島の娘遍路」の一団であったと古老は言う。

現在では、嫁入り道具の一つとして、お茶やお花の免許をとることや、大学を卒業することなどが大きく取りあげられている。しかし学校の無かった江戸時代には、納経帳をもっている娘は、肉体的に健康であり、忍耐強く、そして信仰が深い証拠として歓迎された。（右の納経帳参照）

そのため嫁入り前に必ず遍路をさせるという慣習は、単に四国地方ばかりでなく、四国の対岸の山陽道の諸国にも見られたのである。

たとえば、安芸の魚島や備中浅口郡乙島村、更には、瀬戸内海に浮かぶ島々にこのような慣習が特に強く存続していた。また縁談を断わる際に、「うちの娘はまだ遍路に行かせていませんから」と言う地方が皆しばしば見られたのは、遍路に出ることが一人前の女性とみなされたからである。

交通機関の未だ整備されなかった江戸時代において、四国88カ所の全行程 1,500 km を、女の足で巡拝することはたいへんなことである。50日から60日間、毎日険しい道を歩み続けなければなら



天保時代の女性「綿屋満さ」の納経帳

ず、食事つきの旅籠^{はたご}などは一部の城下町を除いては、殆ど皆無であった。そのため、1泊、6、7文の木賃宿では、道中で買い求めた食料で煮炊きする不便さにたえねばならなかった。また格安の遍路宿では、センベイ蒲団で雑魚^{ざこ}寝^ねさせられ、垢で濁った風呂にも入らねばならず、裕福な家庭で育った乳母^{おんぼひがき}日傘の「箱入り娘」とにとっては、この「巡礼の旅」は大きな精神修養の道場でもあった。

ただ、いかに安あがりの四国遍路とはいえ、旅費が1両近くもかかる遍路の旅は、路銀も十分に持てぬ娘にとっては、かなり経済的にも苦しかった。そこで路銀の乏しい娘たちは、旅の費用を節約するために、速足で各霊場をまわったので、これを人びとは「駆け足遍路」といった。経済的にも豊かになった現在、タクシーで巡拝するいわゆる「大名遍路」とくらべると、まさに隔世の感がある。

ところで、江戸時代から、明治、大正、昭和と時代が進むにつれて、物質文化が発達したため、旅行をするのにたいへん便利な道具が次々と作られるようになってきた。そこで、前頁の物集女村では、西国巡礼をする若者たちに新しい道具を使用させて旅にださせるか、それとも、逆に肉体的な修業をつませるために、昔ながらの物集女村の慣習に従って若衆組を巡礼させるかがその都度問題になった。たとえば、大正時代までの巡礼の雨具は、ゴザで作られたミノを着ていた。しかし、昭和5年に、巡拝者の親から、雨ガッパに変えてほしいという願いが出された。いつの時代でも言えることであるが、子供たちに辛い思いをできるだけさせたくないというのが親心である。しかし、絶対的な権限をもつ先輩（前の年に巡礼した若者の集団を物集女村では、ミタテ講という）は、昔からやってきたシキタリを後輩に受け継がせたいと、しばしば親の「お願い」を拒絶している。

このように旧慣先例を大切にしようとする先輩たちと、子供には少しでも楽をさせてやりたいという親心とが、物集女の村でも、毎回議論されたと古老は言う。

しかし、私が物集女の古くなった昔の写真を見た限りでは、巡礼の姿や巡拝の方法も、時代とともにかなり変化していることが分かる。たとえば、履物についてみると、昔のワラジばきから、やがて地下足袋に変わっている。また江戸時代では京都から2日かかりで伊勢の玉城町まで行き、そこで1泊した。玉城町には昔遊廓があって、結婚前に若者たちはそこへ行き「筆おろし」、つまり、「童貞を失うことによって結婚への準備をしたものである」と笑いながら古老は語ってくれた。ところが、大正・昭和と時代が進むにつれて、若者たちは、京都から伊勢まで汽車で行くことに変更された。そしてまた、玉城町の遊廓で宿泊することは「風紀上、好ましくない」との女性からの批難により禁じられた。このように物集女の巡礼だけをとり見ても、巡礼の目的が時代とともにかなり変化してきていることが理解出来よう。

ところで、私が一番ここで問題にしたいのは、江戸時代の「西国巡礼・四国遍路」や現代の「修学旅行」は、どのような目的で、若者を旅に出させるかということである。

そこには、時代により、また地域によりさまざまな目的があるように思われる。まず第一に考

えられるのは、若者にいろいろなことを身をもって体験させ、そして集団生活を通しての『人格の形成』。次に、若者に郷土・近隣の外の世界を見聞させて、「異」文化に触れさせ、多くの知識を習得させるための『学習』。更にはまたレジャーを兼ねて気軽に巡る物見遊山的な『レクリエーション』などが考えられる。

これらの目的の中で、どれに最も力点を置くかで、旅行の方法も変わってくる。極端な例になるが、昨今の京都に来る修学旅行の学生の変化した姿を見ると興味がある。まず、昔のように大きな荷物を持って汗だくで走っているような者はいない（これは宅配便が同行しているからである）。そして、個性的な行動をとらせるのが目的なのか、団体バスは使わず、仲のよいもの同士がタクシーに分乗し、旅館から行楽地（社寺も含む）に行くようになったのもおもしろい。

ところで、修学旅行や巡礼などの「旅」には危険が伴うものである。一昨年（2016年）の3月には、中国へ旅行した高校生が、上海郊外で生じた列車の正面衝突で、多くの若い命を散らしてしまった。その時、テレビや新聞は、かつて昭和30年の5月に起きた紫雲丸の事故、すなわち四国の高松から宇野に渡る連絡船が沈没し、修学旅行中の中学生を含む168名が犠牲になったときの事故に関連したニュースを繰り返し報道していた。

このように若者たちの集団が「旅」の途中で遭難にあい不幸にも命を落とすことは、なにも現代社会に限られたことではない。私の調査したところでは、江戸時代においても、このような事故はしばしば見られたのである。遍路の道中で事故に遭い、若い命を失ってしまった事例を、私が初めて知ったのは、四国霊場第八十三番の八栗寺の本堂であつた。

私は四国遍路を体験するために、屋島から、五剣山で有名な八栗山へと向かった。八栗山に着いた私は、住職にお願いして、江戸時代の古い過去帳を見せてもらった。何冊目の過去帳であつたか忘れたが、寛政の頃のものを見ているうちに、ハッと驚いた。それには娘遍路が崖から足を踏みはずして死亡したと記載されてあつたからである。寛政9年（1797）であるから今から200年ほど前のことである。備中の賀陽郡阿曾村（現在の岡山県賀陽町）の清蔵の娘、「お繁」さんが八栗寺へ登る途中で18歳の命を落としている。

四国の各霊場に残された江戸時代の過去帳には、他国から遍路に来て、家に帰りがけずに命を落した人びとが、私の調査では1,000名以上も浮かびあがつた。また各霊場に保管されてある過去帳には、遍路の出身地や死因（例えば弥谷寺では文政13年に播州明石郡印地村の新太良が首を吊って自殺）とか、そのときに所持していたお金の額なども詳細に記載さ

寛政九年
二月
丁巳
智巖信女

備中賀陽郡阿曾村
清蔵娘巡礼於繁
十八歳墮巖而死



れてあるのには感心した。

昨年（昭和56年）の夏にも私は今治市の泰山寺（五十六番）で右の写真に見られるような位牌を発見した。それはこの寺へ行く途中の粘土質の多い遍路道で足を滑らせ、摺り鉢状のタメ池であった「蛇池」に落ちて這い上がれずに、水死した鍵屋小兵衛の位牌であった。彼は宝暦9年（1759）に京都の四条縄手弁才天町（現在の京阪三条の東側）に住んでいた遍路で、

銀300匁の寄附で位牌が作られた（上の写真参照）。



このように、旅の道中の事故は、四国の遍路ばかりではない。江戸時代の西国巡礼者たちにおいても同様であった。特に遭難として大きく取り上げられる場所は、竹生島（ちくぎ島）にある第三十番宝厳寺への参拝の途中であった。この寺は琵琶湖に浮かぶ霊場であるために、船に乗らなければ参詣することの出来ない唯一の札所である。天候にさへ恵まれれば、波静かな湖面に浮かぶ竹生島は、遠くから見ると、島全体が松や杉におおわれ、深緑の島として実に美しい札所である。しかし、ひとたび悪天候となれば強い風が吹き、波が大きく荒れ狂う難所となる。丁度そのような折に事故が何回となく発生していた。特に「巡礼ブーム」（第2期）となった元禄時代から巡礼者の数も急増してくると竹生島での遭難も多くなってきた。たとえば「紀州九木浦庄屋記録」には、享保9年（1724）に「順礼廿余、竹生島渡ニ而死」とあり、更に宝暦5年（1755）に「江州水海にて順礼七拾貳人溺死、内当国^{（近江）}之者多し」とある¹⁾。（第1期の巡礼ブームは室町時代であるがそれらについては61頁で述べる）

また安永年間のことであるが、巡礼者たちを満載した船が、途中の長浜の沖で沈没した。その際に、多数の巡礼者が死亡したことは言うまでもない。ところで、これらの巡礼者が持参していた納札をもとに過去帳が作られた。最近になって、寺の過去帳から当時の巡礼者の名前と住所が明らかにされたため、その子孫にあたる血縁者たちが、先頃和歌山地方などから多勢かけつけ、先祖の霊を供養する法要が営まれたこともつけ加えておこう。

1. 江戸時代の巡礼札の再考

私が『巡礼の社会学』（ミネルヴァ書房）を刊行してから満20年が経った。言いかえると、昭和

1) 新城常三『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』昭和57年塙書房 p. 1006

45年から今日に至るまで、社会学者や民俗学者、更には歴史学者たちから「巡礼の社会学」に対して、私の研究の不十分さや誤っている個所などを、彼らの著書や雑誌の中の論文を通じて、いろいろな側面から指摘していただいた。そこで次に、それらの中から2～3の論文を引用させてもらい補足補正することにした。

昭和62年は、花山法皇が西国巡礼を始めてから、ちょうど1000年に当たる年というので、西国三十三カ所の各霊場においては記念法要やいろいろな催し物が行われた。そのとき、私にも札所会から、西国巡礼に関する書物を刊行してはとの誘いがあった。そこで私は佐藤久光氏（種智院大学助教授）と共に、昭和45年に西国巡礼の人びとに対して調査をしたのと同じ方法で、アンケート用紙を使って巡礼者を調査することにした。この調査の結果は（現在、四国遍路の調査を集計中であるため）次号で改めて発表する予定である。

ただここでは、西国霊場の巡拝者たちが、昭和45年と20年後とでは、非常に異なっていることが2つあったことだけを記すことにとどめよう。まず第1に目立ったことは、昭和45年には1年間の巡礼者の数が約3万名であったのが、昭和50年代からその数も急激に増加し、現在では8万名近い人びとが霊場を巡っているのである。

第2は、年齢層に変化があらわれたことである。すなわち、年齢別に見ると、昭和45年には60歳代の巡礼者が一番多かった。ところが今回調査して分かったことは、巡拝者の割合が一番多かったのは50歳代であり、次に多いのが40歳代であった。そして、60歳代は第3位に落ちていた。

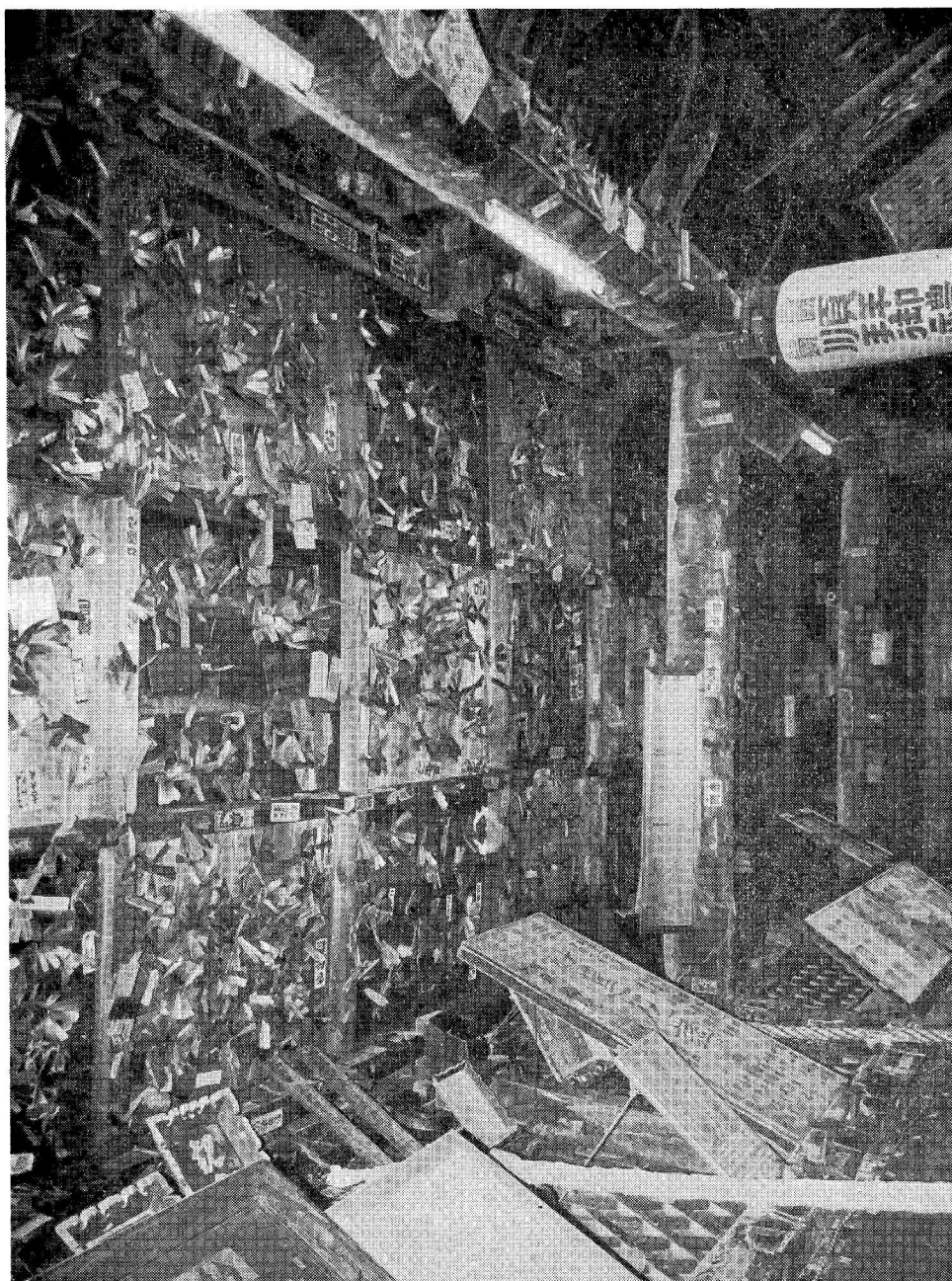
調査前の私は、単純に高齢化社会になっている昨今のことであるから、60歳以上の巡拝者が今回の調査では、当然20年前よりもかなり増加していると考えていた（昭和45年には60歳以上の人口は僅か10.6%、現在では全体の17.4%）。

昭和45年の調査の時には、60歳代から70～80歳代を加えると、巡拝者の割合は全体の58%を占めていた。しかし、今回は50歳代と40歳代だけで全巡拝者の70%以上を占めているのが特記すべきことである。団塊の世代と言われている人びとを含む中年層に巡礼者が増加してきたのは、どこにその原因があるのだろうか。いくつかの要因が考えられるが、しかし前にも述べたように現在、四国八十八カ所の巡拝者を調査している最中なので、その集計が終了してから、次号で結論を出すことにする。では次に、江戸時代の西国巡礼の「納札」に話をもどすことにしよう。

たとえば新城常三博士は昭和57年に刊行された書物の中で「江戸時代の巡礼については前田卓氏の業績に負わねばならない」²⁾として、次頁の写真にある一乗寺などの4カ寺の天井板から、1万2,000名ほどの納札を蒐集したことを評価していただいた。更に新城博士は「これらの納札を国別・年代別に分類し、国による巡礼の多寡・年代の変遷・推移をあとづけているが、これによって、四国遍路に比して、史料の貧困な近世の西国巡礼研究を大きく前進させた功績は大いに多とせねばならない」³⁾と述べられているが、しかし4カ寺の霊場に残された納札についての私の

2) 左同書 p. 1000

3) 左同書 p. 1006



西国第二十六番霊場 法華山一乗寺の本堂の天井に打ちつけてある江戸時代の納札

調査がいかに不十分であったかは、その後の多くの研究者たちにより指摘されることになった。

「巡礼の社会学」を刊行してから数年後、私の研究室に元興寺文化財研究所の方が訪ねてこられた。用件は次頁の写真にある一乗寺（第二十六番）やその他の3カ寺の霊場で、江戸時代の納札を私がどのような方法で調査したのかを尋ねに来られたのであった。そのとき私は、西国三十三カ所の霊場の中で私が全く調査していない札所が数多く残されているので、研究所の方々がそれらの札所に行き、日時をかけて根気よく納札を調査されれば、必ずや興味ある結果が生まれるのではないかと返答した。

その後、元興寺文化財研究所から「近畿地方を中心とする霊場寺院の総合的研究」と題する書物（昭和60年発行）が送られてきた。その論文の中には「昭和45年、前田卓氏により調査が行われたが、その時点において慶安2年（1649）から元治元年（1864）の紀年銘があり、6,325点残存していた。しかし、今回の調査では本堂の天井や柱などに張りつけられたもののほか、長押から発見されたものも含め、約4,800点近くの納札が現存している。数量は少なくなったが、前田氏の調査の時よりも古い寛永6年（1629）の納札が2枚発見されている」⁴⁾と書いてあった。

私が調査した本堂は元和3年に焼失し、現在の建物は寛永5年（1628）に再建されたものであるから、寛永年間の納札が発見されたとしても不思議ではないだろう。ただ、私が不可解に思うのは、慶安年間からは、殆ど毎年のように納札が打ちつけてあるのに、寛永の納札から20年もの間、その時代の納札が全く発見されていないというのは、どういう理由によるものであろうか。その原因について更に研究してみたいと考えている。

ところで、私が、この元興寺文化財研究所の論文を読み非常に驚いたのは、西国三十三カ所に所属していない奈良県の当麻寺で、室町末期〔文明11年（1479）の納札〕から江戸時代の巡礼の納札が477枚も発見されたということであった。

この書物によると、私が指摘した三十三カ所の霊場には、期待されるほどの納札は発見されなかったと言う。すなわちこの論文によると、霊場の中で、全く納札を所蔵していない寺院が調査した25カ寺のうち10カ寺あり、また納札を所蔵していた寺院も、私が調査した4カ寺を除くと殆どの寺が納札を数点から数十点しか所蔵していないことが判明した。

ところで、西国霊場に所属していない奈良県の当麻寺で、何故、納札が多数発見されたのであろうか。周知のように、奈良県にある当麻寺は、地理上から見ると、葛井寺（第五番）と壺坂寺（第六番）の中間に位置している。そこで、江戸時代の巡礼者たちは、葛井寺を打ってから、現在の羽曳野市から太子町を通り、大和高田市に出るには、どうしてもこの当麻寺を通過することになる。昔から有名な当麻寺のことであるから、ついでに巡礼者たちは当麻寺にも立ち寄り、その折に賽銭箱などの中に納札を入れたものと考えられる。

また同じく昭和60年に刊行された滋賀考古学論叢の雑誌には、西国札所に属していない桑実寺

4) 稲城信子「納札—巡礼寺院の一側面—」元興寺文化財研究所編『近畿地方を中心とする霊場寺院の総合的研究』同研究所発行昭和60年 p. 66～73

(第三十一番長命寺と次の観音寺の中間に位置する)からも江戸時代の西国巡礼の納札が209枚も発見されたことが報告されている。この「桑実寺本堂発見の巡礼札」⁵⁾と題する論文によると昭和47年より室町時代前期の本堂(重要文化財)の解体修理が滋賀県教育委員会によって行われた。

さて、ここで発見された納札で特記すべきことは、木(スギ、サワラ、ヒノキ、モミ、クス、キリなど)で作られた納札に釘孔が認められたのは僅かに1点にすぎなかったということである。一般に、木の納札は8頁の写真でも分かるように寺の柱や扉、更に天井などに巡拝の際に打ちつけて帰るものである。しかし、桑実寺のように納札に釘孔が無いのは、納入箱か堂内の特定の場所に納められそのまま長い間放置されていたものが、今回の発見で、日のめを見たものであらう(納札の釘孔の有無については次号で触れる)。

さて、この桑実寺で発見された納札の中では、最も古いものが貞享年間(1648~1688)のものであり、最も新しいものとしては文政年間(1818~1830)の納札であった。しかし、紀年銘の判読できる巡礼札の大半は、寛保元年(1741)から宝暦2年(1752)の間に集中しているという。

ところで巡礼者を出身地別に見ると、出身地が判明した納札は170枚であり、そのうち摂津(29枚)が最も多く、続いて山城(16枚)、播磨(11枚)、紀伊、遠江、豊前が各々10枚の順となり、東国地方の巡礼者は非常に少なく武蔵(3枚)、陸奥(4枚)、出羽(1枚)である。

そこでこの論文は「西国巡礼は、西国という名称が示すように、東国出身者を中心に行われていたのではないかという見解がある」⁶⁾が桑実寺の納札を見る限り、畿内、西国出身者の数が東国出身者よりも多いという結果を得たと述べている。

このような見解は、前に掲げた元興寺文化財研究所の論文の中でも指摘されてある。すなわち、当麻寺では、最も多く奉納されている納札は、元和元年(1681)~元禄13年(1700)の間のものであり、その数は111点にのぼるといふ。そして、巡礼者の出身地は、「東国が多いという定説がある」⁷⁾が、当麻寺の納札による調査では、山城(31点)、近江(24点)、武蔵(23点)、紀伊(20点)と続き、一概に東国出身者が中心であったともいえないと述べている。

以上の2つの論文では、西国三十三カ所の霊場に属していない奈良の当麻寺や滋賀の桑実寺から発見された納札を、出身地別に分けて考察した結果、私の主張しているような関東地方の出身者が必ずしも大勢を占めているとは言えないとの結論であった。

ただ私に言わせると、江戸時代の納札を考察するのに最も重要なことは、江戸時代の前期と幕末に近い後期とでは巡礼者の出身地が全く異なっているということである。私の調査した納札の約1万名(12,507名)を出身地別、そして更に時代別に区分して並べてみると実に興味ある結果が得られたのである。

すなわち、私が調べたところによると、江戸時代の初期から元禄時代までの巡礼の数に関して

5) 兼康保明、河内美代子「桑実寺本堂発見の巡礼札」『滋賀考古学論叢第2集』p. 163~167

6) 同上 p. 165

7) 元興寺文化研究所編 p. 69

表 1 納札が霊場に残された期間

一乗寺	1864	1648
穴太寺	1873	1743
善峰寺	1875	1744
粉河寺	1880	1813

表 2 4か寺の納札から出身地別に分けた割合

寺名 出身地	一乗寺	穴太寺	善峰寺	粉河寺
武州	38.6 %	24.4 %	16.2 %	12.2 %
長州	10.1 %	21.1 %	11.5 %	42.2 %
山城	3.8 %	13.2 %	17.1 %	31.9 %
下総	12.06 %	0.001 %	0.005 %	0.001 %

は、武蔵の国の礼巡者よりもむしろ下総の国（千葉県の一部と茨城県の一部）を中心とした北関東の「常陸」や「下野」の巡礼者の方が多数を占めていた。それが元禄時代より武蔵の国の巡礼者が急激に増加し、逆に下総などの巡礼者が激減している。そして、寛政年間（1789～1800）から享和元年（1801）頃にかけては、武蔵の国の巡礼者も次第に減り始める。

これに反して、長州の巡礼者は明和年間（1764～1772）から次第に増加し始め、文化・文政時代（1804～1830）が最高潮となる。そして、特に私が興味があったのは長州の武士は天保から嘉永、安政にかけて、かなりの数にのぼる巡礼者が霊場にやってくるのである。

このように関東地方の武士は江戸時代の前半に、そして長州の武士たちは江戸末期に多数巡礼にやってきた、というような巡礼者の動きは、私が調査した4か寺の納札がいつ頃から発見されたかを知ることによって、更に一層明確になるのである。

上の表1でも分かるように、一乗寺の納札は慶安2年（1648）から元治元年（1864）までの217年間である。そして穴太寺は寛保3年（1743）、善峰寺は延享元年（1744）からである。ところが粉河寺は文化10年（1813）から明治までの僅か67年間である。

さて、この4か寺の中で発見された納札を出身地別に分けた割合を表にすると表2のようになる。この表でも分かるように一乗寺で最も多かった納札は、武州の38.6%、次に下総の12.06%、そして第3位は長州の10.1%となる。そして第4位が下野の国（栃木県）の5.1%である（表にはない）。

ところが粉河寺を見ると納札の半数近くが長州となり、武州は1割台に落ちる。そして、下総の納札は僅か1名しか発見されなかった。また畿内の山城の納札は一乗寺には僅か3%強であるが、穴太寺や善峰寺では1割から2割近くなり、粉河寺では3割と、次第に増加するのも興味深い。このように見てくると、納札が発見された時代やその期間によって出身地が大いに異なっ

いることが理解できよう。そこで結論として私は、東国の武士たちが江戸時代の前期までは、かなり多く巡礼に出たものと断言する。

近畿地方の三十三カ所霊場を「西国」と言い、関東地方の三十三カ所霊場を「坂東」と呼んで区別したのはいつ頃であるかは、学者によっても学説がいろいろあるが、少なくとも室町時代の末期には関東地方の人びとが多数京見物をかねて西国巡礼にやって来たことは否定できない。そして巡礼の大衆化、言いかえるならば第1期の「巡礼ブーム」をまきおこしたのも、この関東地方の人びとによるものが大であったことは間違いない。また関東の人びとは往きは東海道を歩き、伊勢神宮を詣うでてから第一番の那智山に行き、最後に第三十三番の美濃の谷汲山を打ってから、中山道を通り、その途中で善光寺にまいって関東地方へ帰っていったと想像される。ちなみに、中山道（草津より板橋まで）は東海道（京都三条より日本橋まで）よりも僅か3里しか長くなく、また中山道は東海道とはちがって、大きな川もないので「川越え」のために要する人足の費用や雨天のための「足止め」による当地での滞在費もいらず、巡礼者にとっては何かにつけて便利であったこともつけ加えておこう。このように考えてくると、現在の西国巡礼の寺の順番は、やはり東国人にとって打ちやすい道順に作られたように思われる。更にもう一步踏み込んで、何故、関東の武士たちが観音巡礼に関心があったのかを知るためには、鎌倉時代の歴史にまでさかのぼる必要があると考える。すなわち、関東地方にも近畿地方と同じような三十三カ所観音霊場がつくられたのは、後鳥羽上皇をはじめ3上皇が配流された『承久の乱（1221）』がおきてから僅か十数年後、すなわち、貞永式目が作られた翌年の天福年間であること。また当時は、両者の霊場に「西国」、「坂東」の名称はまだ無かったことも注目しなくてはならない。また関東地方にある三十三カ所霊場は、第一番が鎌倉から出発しており、現在では最も人で賑わっている浅草の観音さんは第十三番目であったことも興味がある。たしかに江戸時代になって、江戸っ子たちが「江戸自慢十三番がこれくらい」と皮肉ったのもうなづける。

ただ「西国」と「坂東」との問題、言いかえるならば『院政時代の貴族の文化』と、これに対抗して出来た『鎌倉時代の武士の文化』との関係については、西国霊場と坂東霊場との起源から考察する必要があるので、かかる問題は紙幅の関係上次号で述べることにする。

2. 室町時代の巡礼の大衆化（第1期の巡礼ブーム）に 貢献した順礼聖

右の写真は今年の春休みに私が石山寺へ行き、鷲尾住職のお許しを得て撮影したものである。手にもっている大きな納札は、室町時代に甲州の小地図書助と言う願主が石山寺に奉納したものである。話は70年前にさかのぼるが、当時京都大学の中村直勝先生が、東大の史学科の学生の修学旅行団を石山寺に案内した時のことである。



鷲尾住職の話になると、中村先生の郷里は石山寺の近くであり、しばしばこの寺を訪ねてきていたという。

大正9年の「歴史と地理」⁸⁾という雑誌の中で、中村先生は『石山寺の古順礼札について』という論文の巻頭に、黒板博士に引率された東大生のお伴をして、石山寺へと、舟で勢多川を下ったと書かれてあるのがおもしろい。

右の図は中村先生の論文の80頁に掲載された納札である。私も『巡礼の社会学』の28頁に、中村先生に見習ってこの納札を写真入りで掲載した。

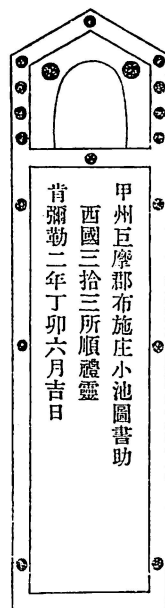
さて話はとぶが、去年の暮れに、私の学生時代の恩師であった柴田實先生のお宅にお見舞いを兼ねて遊びに行った。その時に、この室町時代の納札が話題になった。柴田先生は学生時代に、中村先生が授業中に、この室町時代の納札について、いろいろと説明されたという。特に柴田先生にとって印象が深かったのは、左端に書かれてある弥勒という年号であった。弥勒2年とは私年号であって、それは永正4年に当たるという説明が加えられたそう。弥勒という私年号は、甲斐・信濃方面で使われ、その発生原因を中村先生は「澆季の世となり、生活難甚しきため弥勒菩薩の出生によって、その苦境を脱せんとする願求より、弥勒菩薩の名を絶えず称えるために、かかる私年号を採用せしなり」⁹⁾と書いておられる。

しかし、私年号については、その後いろいろな研究がなされた結果、この私年号は「旧録司代家文書」や「香取文書」「本上寺過去帳」などに見られ、弥勒元年は永正3年とする説よりも、

永正4年であるという説が多い。そうすると、順礼聖の弥勒2年は永正5年ということになるが、それはとにかくとして、弥勒という私年号は、弥勒信仰にもとづいて天災、戦乱などを前にして改元すなわち代替を期待した人びとの願望をうけて、僧侶が介在したことは間違いないことであろう。ただ、

この弥勒という私年号は単に甲斐や信濃地方に見られたのみではなく、関東地方や陸奥でも3年間ほど使用されていたようである。

次に納札の中央に書かれてある西国三拾三所順礼霊の一番下の文字は、左の写真からも分かるように、「霊」ではなく「聖」という文字である。この文字の王という部分が釘穴で大きく破壊されているため非常に読みにくかった。し



聖
聖
聖
聖
聖

8) 中村直勝「石山寺の古順禮札について」史学地理学会同致会編輯『歴史と地理』第五巻第四号大正九年 p. 77
9) 同上 p. 81

かし、この文字が「聖」であることは柴田實先生やその他の人びとによっても認められている¹⁰⁾。

ところで16世紀の初頭において「順礼聖」という文字が納札にも見られたということは、この納札は社会学的な研究においても非常に貴重な資料といえよう。

さて、順礼聖という言葉はあまり人びとに知られていない。しかし『高野聖』というと、すぐに泉鏡花の「高野聖」を思いうかべるように、かなり一般に知れわたっている。

そこで私はまず高野聖について解説し、それとの比較において順礼聖を見ていくことにする。高野聖という、小説に出てくる道心堅固な修行僧の中に隠された愛欲がどうしてもクローズアップされてくる。

たしかに近世以降の高野聖の評判はあまり良くはない。たとえば、高野山の奥の院で焚かれる「護摩の灰」を薬といって売りつけて金を儲けたり、また江戸時代には「高野聖に宿かすな、娘とられて恥をかく」と言われたり、ヒジリという文字に非事吏と書いていやしめられることもあった。

しかし、本来、聖というものは、周知のように、正式の度牒をもたず、寺院に入らぬ私度僧であって、私的に修行している隠遁僧のことを言うのである。この聖の特質として五来重氏¹¹⁾は、次のようなものをあげている。すなわち、隠遁性、苦行性、回国性、呪術性、集団性や、世俗性更にはこのほかに『勧進性』をあげている。われわれの社会学にとって、最も重要なのは、この聖の勧進性である。

本来、『勧進』という言葉は、宗教的な用語で「庶民に仏道を導き、勧めて善に向わせること」であるが、それがやがては社寺や仏像の建立、修理のために人びとから金品の寄付を募ることに力点が置かれるようになってくる。そして、中世の宗教界には、特にこの勧進による経済活動が重要なものとなってくる。前記の五来重氏が、現代仏教を観光経済とするならば¹²⁾、近世仏教は壇家経済（江戸時代の壇家制度を言う）、そして中世仏教を勧進経済と規定していることは、まさに言い得て妙である。

周知のように、高野山は、古代末期から納骨の霊場として知られ、近世には「日本総菩提所」の名で、宗派にこだわらず納骨が行われて来た。

現在でも、年々訪ずれる数十万の参詣者の大部分が、納骨かあるいは、これに代わる塔婆供養を目的として参詣している。このような宗教的行為は、高野聖を抜きにしては語ることは出来ない。すなわち、高野聖は「唱導によって納骨参詣を誘引し、回国しては野辺の白骨や委託された遺骨を笥に入れて、高野山へ運んだ」¹³⁾からである。（蛇足になるが、高野山の宿坊に関して言えば、私が高野山へ巡礼の調査に行き気がつくことは、ここ2～3年、夏の暑い時期に、高野山の宿坊で泊まる巡礼者の数が急激に減り、日帰りで山を下る者が多くなっていることである。そ

10) 元興寺文化財研究所編 p. 68

11) 五来重『高野聖』角川新書昭和40年 p. 40～64

12) 同上 p. 52

13) 同上 p. 12

の原因はよく分からないが、最近、各家庭に冷房設備が普及したのもその一因かも知れない。

また、高野聖の役は、宿坊を提供することでもあった。すなわち、納骨や供養のために高野詣をする人びとに宿の世話をしたのである。現在、50余りある宿坊は学僧方や行人方の寺院であるが、もとは聖方^{ヒジリカク}の院坊を合併することによって宿坊権を得たのである。

さて、西国順礼聖に関しても、高野聖と同じような特質があげられよう。ただここで問題になるのは、高野聖という文字は、中世にはすでにいろいろな文献においても発見されているが、しかし、順礼聖という文字は、私の知る限りでは中世に出されている文献には発見されていないので、その意味でも石山寺の納札はたいへん貴重なものと言えよう。（但し、後にも述べるように巡礼行者という文字は存在していた）。

ところで西国順礼聖に関する研究は、あまり見かけることはできないが、その中でも豊島修氏（大谷大学助教授）の「西国巡礼聖の一資料」という論文は、私にとって非常に役に立つ研究資料であった。この論文の中で、「順礼聖は平安時代から中世にかけて、巡礼霊場と参詣者との間に立って、霊場の縁起や霊験などを語りながら一般庶民を巡礼に導いた功績は大きかった。そして中世末期には那智山を本拠地とする回国巡礼（西国巡礼行者）の大きな組織が見られた」¹⁴⁾ ことも述べている。

さて、前記の石山寺に保管されている納札が発見された室町時代も後期の15世紀の中頃になると、「巡礼の大衆化」とも呼ぶべき現象が起こった。そのことはまた現存する15世紀の「多数の納札」からもその一端がうかがえる。

また天井や柱に打ちつけてある古い納札は江戸時代の好事家の対象となった。その中でも喜多村信節は『嬉遊笑覧』（文政13年）の中で応永年間（1397～1428）の納札が沢山あったと書いているところを見ると、化政時代には、15世紀の納札が多数残存していたことが分かる。

また室町時代の巡礼の大衆化に関しては、『竹居清事』に永享の頃（1429～1491）に、「巡礼の人、道路織るが如し」とあり、『天陰語録』には明応の頃（1492～1501）「巡礼の人、村に溢れ里に満つ」とある。しかし、これらの文書はすべて五山禅僧の語録であるため、多少の誇張はまぬがれまい。

ただ室町時代になり、僧侶たちに混って俗家の人びとが巡礼に加わるようになったのには、まず産業の発達を考えられる。南北朝の内乱で大きな打撃を受けたのは荘園制度であり、その崩壊によって『郷村制』がとられた。すなわち小農民を含む惣百姓の自治的集団としての村が発達し、これらの上層民の中から番頭・沙汰人・オトナなどという村役人が生まれ、やがて、これらの人々が巡礼に出ようになる（ただし、下層の農民の巡礼への参加は江戸時代の後期である）。

また、室町時代は、産業・経済の発達期でもあった。農業では、経営の集約化と多角化がすすみ、二毛作も普及してきた。また、稲の収穫も畿内を中心とする先進地域では著しく増加した。

14) 豊島修「西国巡礼聖の一資料」大谷大学国史学会創立50周年記念論集『日本人の生活と信仰』p. 552

種々の野菜を作る畠作も京都や奈良の近郊を中心に発達した。

この農業の発達、農産物の交換を盛んにし、商業の発達を促進したため、当然ながら、行商人も増加した。この行商人による巡礼者の泰明期もこの室町時代であった。

そして、農業や商業の発達や商品経済の隆盛は、やがて貨幣の流通をも盛んにした。すなわち宋銭のほかに明銭の永楽通宝が用いられ、また国内産の私鑄銭も流通したのである。

さらに、このような貨幣が、一般の人々に使われるようになると、巡礼者にとって最も重要な、言い換えると、旅行に必要な「お金」が幅をきかせるようになったため、その結果、巡礼の大衆化が生まれるのである。

また、宗教の民衆化が進むにつれ、社寺の祭礼の日や縁日には門前市が開かれるようになり、「門前町」が生まれるのもこの時期である。

そして、中世以降は、農民や商人などが暇をみつけては、風雅な旅を楽しむというように変わっていったのである。

勿論、当時の農民や商人が巡礼に出た大きな目的は、日常生活からの超脱ということが考えられよう。すなわち、中世の農民たちは、一生涯土地に束縛された苛酷な労働を強いられたため、そこからの救いを求めて、非日常的な巡礼という宗教的な行動に出たのである。言いかえるならば、日々の行動を律する制度や道徳から解放され、現実の動かしがたい束縛から逃れて自由な旅にあこがれたのであった¹⁵⁾。

このように、室町末期の巡礼の大衆化の要因として、私は民衆に対して巡礼することを宣伝した「巡礼聖」の役割を高く評価したい。それはあたかも高野聖が中世から近世にかけて、高野山詣を盛んにしたのと同じであって、巡礼聖もまた室町時代には、現在の修学旅行の添乗員（昔の先達）のような役割を果たしていたように私には思えるのである。

15) 五来重『遊行と巡礼』角川選書平成元年 p. 30 p. 8